

芦屋大学論叢 第73号
(令和2年9月16日)抜刷

戦後6・3・3制の先導的試行に関する一考察(2)

—新潟県の「関谷学園」、全村的生産教育の実態—

三 羽 光 彦

戦後 6・3・3 制の先導的施行に関する一考察（2）

—新潟県の「関谷学園」、全村的生産教育の実態—

さん ば
三 羽 光 彦

はじめに

本論叢の前号（第 72 号・2020 年 3 月）で、戦後の新学制発足の前年度に文部省の教育研修所が 6・3・3 制の研究指定校として位置づけた新潟県の「関谷学園」について、その構想と理念、設立経緯を明らかにした。それは、城戸幡太郎の教育思想に共鳴した佐藤仙一郎（栃木師範学校教授・女子部長）が郷里の関谷村（現・関川村）に開設したもので、いわば生産教育に基づく地域教育計画として実施されたユニークな実践であった。まさに地域社会に根ざした新学制の一つのイメージを示したものであった。城戸の構想には、阿部重孝の 6・3・3 制論や教育刷新委員会の議論が反映されており、その意味で、「関谷学園」は、戦前からの日本における 6・3・3 制構想を具現化したものと見ることができる。本稿では、前編に続いてこの「関谷学園」の実態と歴史的意義について考察することとした。なお本稿は、2019 年度学術振興会科学研究費補助金「近代日本の農村教育自治に関する調査研究」（基盤研究C・代表者：三羽光彦）の成果の一部である。

I. 「関谷学園」の開園

1. 開園までの準備

(1) 県庁との協議

佐藤仙一郎の『日誌』¹⁾によると、1946（昭和 21）年 3 月 2 日に関谷村の研究指定校の名称を「関谷学園」とすることに決め、翌日からその計画書の執筆に着手した。ついで新潟県や新潟師範学校との打ち合わせのために新潟市に向かい、3 月 7 日に県庁で教育民生部長と面会し「関谷学園」の構想を説明した。部長はその計画と趣旨を了解したが、法規上の問題を研究する必要があると答えている。また県視学官室で、青年学校を本科・高等科・研究科に編成し甲乙二類を設置すること、現在の青年学校生徒・国民学校高等科児童の編入方法、中等学校卒業者の研究科入学希望者について協議している。3 月 8 日には新潟師範学校長加藤覚亮を訪ね、「関谷学園」の顧問就任を要請し、「関谷学園」が師範学校の教育実習校となる用意があることなどを協議している。この時点で、研究指定校の名称は「関谷学園」と決定したが、いうまでもなくそれは関係者間の通称または仮称であった。あくまでも法規上は国民学校と青年学校ということで、3 月 31 日に発令された佐藤仙一郎に対する辞令も、関谷村立関国民学校（土沢、金丸、安角沼分校を含む）校長兼関谷村立青年学校校長であった。

ところが、戦後の混乱の中で長距離を移動し東奔西走した佐藤は、8年前に罹患した結核を再発させた。佐藤は 3 月 11 日の未明に咯血し病床に伏すことになった。佐藤は病気のため着任が延びることを村長に急報する一方、ひきつづき計画書の完成に向け病身にむち打ち、自宅のある宇都宮から逐一関谷村に指示を出した。

(2) 生徒募集、国民学校高等科の残置

「関谷学園」（関谷村立青年学校）の生徒募集は3月中に進められた。学園の内容を説明した入学案内が示され、「口こみ」で募集がなされた。しかし、この時点では「農業、農産加工、その他働きながら学ぶ学校」²⁾ という漠然とした説明しかなされず、その学校の性格にとまどう村民も多かったといわれている。それでも村当局の熱心な勧誘がなされ、甲類（フルタイム・全日制）で入学・編入者が男女計111人、乙類（パートタイム・定時制）で同計355人の応募があった³⁾。

ただし保護者の一部は、「学園は農業に重点を置く学校のような。そのような学校より、全般的知識を学ぶ高等科がよい⁴⁾」として、子どもを国民学校高等科に進ませたといわれている。また、中等学校進学希望者も高等科を選んだ。国民学校高等科はその当時の現行法制上の制度であるので、入学・在学を希望する者がいる限り存続させることとなっており、4月から引き続き高等科第1・2学年が組織され、20人ほどが旧来の教育課程で授業を受けた。ただし7月の「関谷学園」開園後は、大部分が学園の中等科に「転校」することとなった。

2. 関谷学園構想の展開

(1) 渡邊村長の「教育村」構想

4月1日には新任職員と旧職員の引き継ぎ式が行われた。関国民学校の教員は校長（佐藤仙一郎）と教頭（吉田三雄）を除いて14人が出席したが、青年学校の教員は7人しか出席できなかった。こうしたなかで国民学校では「進級学年学級を前年度担任者が継続担任」し、「転出教師の学級は新任教師が担当する」形で、学園開校まで前年度に準じて学校経営がなされた。他方、青年学校生徒は、しばらくは「甲類も乙類も家庭で待機」させた⁵⁾。佐藤は、渡邊萬壽太郎村長に、4月3日までは着任して、教員全員が学校で合宿しながら新年度の計画を立てることを約束していたが、関谷に実際に引っ越したのは5月31日であった⁶⁾。

その間、渡邊村長が「関谷学園」の夢を教職員に語っていた。4月3日には関国民学校、関谷青年学校の教職員の希望で村長を囲む座談会が開かれた。村長は、「関谷学園」を「村の教育・文化の中心とすること」、「幼稚園から国民学校、中学校、青年学校まで一貫したものとし、特に中学校は村の産業開発と直結させ、生産教育に重点をおき、働きながら学び学びながら働く学校にしたいこと」、さらに「平和で豊かな教育村への構想」、「病院開設、酪農組合、農協等々」、新しい村づくりについて熱心に語ったといわれている⁷⁾。

(2) 職員会議の意見——発達段階による学校区分の視点

『関谷学園関係資料』のなかに「当時の職員会議から園長に提出した意見書」と題した手書の謄写刷文書が残っている。4月18日に「関谷学園」の教員5人が宇都宮の佐藤仙一郎の自宅を訪れ、新教育について協議しているが、その時に提出したものではないかと推測される。「学園長」不在のなかにあっても、教職員による開園準備が進められていたことが知られる。

この「意見書」の内容は、「国民学校と下級中学校との間に截然たる区別を必要とする」というものであった。それを、心理的、身体的、教育的の三つの理由から説明している。心理的・身体的理由としては、発達段階という視点から、「青年期に於ては児童とは極めて異なる取扱いをなす必要」があることをあげ、「学校、学校経営上特別な配慮を必要とする」と主張している。ついで「教育的理由」としては以下の三点をあげている。

「(イ) 9箇年間同一校長の下で統一された教育を行ふ事は、生徒に対して倦怠の気分を起させ、且は又、何等の感激を起させないやうになる懸念が多い。従って国民学校六年の後の下級中学は原則的に別箇の独立せる学校でなければならぬ。この点は米国に於いて澎湃として起こりつゝあるジュニア・ハイスクール運動を見ればよく解る。

(ロ) 前述二項(心理的・身体的理由のこと—引用者注)の青年の特殊性に対して十分な知識と同情を有し、且つ分科的、専門的学識を有する教師によって指導しなければ青年は学校に対して感激を持たなくなる。

(ハ) 同様の理由から、校舎その他の設備は全然別箇のものであり、青年の知的、情意的、身体的欲求を満足させるものでなければならぬ。⁸⁾

このように論じた上で、初等教育と中等教育の学校はそれぞれ独立設置とすること、それが不可能な場合は「部制の如きもの」を採用して組織内部をはっきりと区分することを提言している。そして具体的に「関谷学園」では、すでに事実上「初等科長」「中等科長」「高等科長」「研究科長」を置いていることを報告している。

「関谷学園」は初等・中等教育の一貫したシステムであったが、そのなかで発達段階に対応した教育指導とそれにふさわしい学校経営・学校組織が必要なことを提言し、すでにそうした方向で組織編成を進めているというのである。「関谷学園」の教員たちが学校制度の本質にまで踏み込んで、集团的に学校経営研究を深めていたのである。

(3) 城戸幡太郎の講演——「教育協同体」論

1946年3月6日に関口所長が退任し、後任には城戸幡太郎が専任所長として任命された。城戸所長は、1946年7月に「教育研修所方針書⁹⁾」を発表して、研修所の性格の第一を、「科学的方法を以て根本的に教育の研究調査をなす機関」と定義し、その運営の一般方針を示した。その一つに、「研究指定学校及び同地区」を設定することを挙げており、その最初のものが「関谷学園」であった。「関谷学園」の教育研修所での位置づけもようやく固まっているのである。

一方、佐藤仙一郎は5月31日に関谷村に移り住むことになった。渡邊萬壽太郎村長のはからいで渡邊家の分家の離れ座敷に入居できたのである。佐藤は当初学校に住み込む予定であったが、健康状態からそれは実現しなかった。佐藤が落ち着くとすぐ、6月8日に城戸幡太郎の講演会が「関谷学園」で開かれ、村内有志や教員など多数が来聴した。城戸の講演の内容は、年来の主張である「教育協同体」論をベースにしたものであった。「文化は農村より起こる」、「学校を文化の中心とせねばならない」と説き、文化建設の意欲に燃えた青年を育成して、村を「文化協同体」「教育協同体」としていくことを論じた¹⁰⁾。また6月17日には「関谷学園」で前教育研修所長・関口泰の講演が開かれた。この機会に学園の開園式を行う予定であったが、準備不足のため開園式は7月2日まで延期されることになった。

3. 雪国農村文化研究所

佐藤仙一郎の1945(昭和20)年12月29日の『日誌』に、「日本農村教化研究所設立」という記述が、また4月4日には「雪国農村文化研究所」とするという旨の記述がある。『関谷学園関係資料』のなかには、その研究所の構想と思われる文書(文書の表題は「雪国農村文化研究所の構想」であるが、文書中では「新日本農村教化研究所」と表記されている)が残されている。この文書ではその趣旨として、研究所と青年学校とを一体化して運営することを述べている。

「青年学校教育を土台として、農村教化を進め、村長と一体となり、教育の進展には村長の力をかり、教化の浸透には村長が実質となって、所期の目的を達すること 之を要するに、学校の研究が直ちに村長の施策となって実現するやうに進めること」と青年学校の改革を論じた後、この改革を実現するための研究所の設置を構想し、名称を「『新日本農村教化研究所』とすること 青年学校と内容は一体たること」、「研究所の研究成果は青年学校の教育に用ひ、又村民の福利施設として村政化すること 更に国民の福利施設に発展せしむること」と記されている。

その研究内容として、「一、食塩製造 二、蛹油製造 三、石鹼製造 四、アミノ酸醤油製造 五、理研パン製造 六、重曹苛性曹達製造」などさまざまな「小企業計画案」が箇条書きされ、研究所、倉庫、工場、住宅などの建物、田畑、開墾地などの試験場、鯉、鱒、鱈の養殖場、図書の収集などと、必要な施設や設備を書き出している¹¹⁾。

佐藤仙一郎は研究所名入りの便箋や印鑑まで作ったが、研究所長になるはずの佐藤が病気になったことなどから、このスケールの大きい計画はとうとう頓挫してしまった。ところで、こうした研究内容が青年学校の教育内容と一体のものとして運営されるとするならば、まさにそれは「生産学校」にほかならない。学校の教育内容としては作乐的・労作的なものであるが、研究内容としては生産的・経済的なものである。要するに、佐藤は村の産業・経済の発展と学校教育を一体のものとして捉えようとしたのであった。それは村を「文化協同体」「教育協同体」としていこうとする城戸幡太郎の構想や渡邊村長の「教育村」の構想と軌を一にするものであった。

4. 開園式

(1) 佐藤仙一郎の式辞

開園式は、7月2日に執り行われた。式は「修礼、君が代斉唱、教育勅語奉読」と続き、佐藤園長が式辞を述べた。その式辞の原稿が残されているが、B4原稿用紙32枚1万3千字にも及ぶものである。式辞の内容は、教育研修所と新教育研究指定校について解説した後、今後の教育は、「日本人として世界の仲間入り出来る、そして世界にすぐれた文化を起こす国民を作る教育」、「日本人の長所とよい伝統とを長養しつつ、民主主義生活を為し、民主主義政治を為し得る国民を作る教育」でなければならないと論じている。そこで佐藤は、民主主義についての彼個人の考え方を開陳している。

「ここで私は、私の考へる民主主義といふものを一言述べる必要を感じます一体民主主義といふものは政治の様式でありまして歴史的所産でありますから、この政治様式を採用する国に於ても、その形態は各国の事情によって皆異なるのであります。米国の民主主義、英国の民主主義、その他の国の民主主義、皆異なるのであります。それで、日本に於ては、日本の歴史と国情によって日本独特の民主主義形態が出来ねばならぬのでありまして、それは目下議会で審議せられてゐる新憲法で定まることであります。」

日本固有の民主主義の確立が必要であること、それは「教育教化によつてのみ為し遂げられる」ことを主張し、教育の重要性を以下のように強調している。

「教育といふものが今迄よりもはるかに重要視されねばならないのであります。教育によつて早く民主主義的な文化国家を作って、国際間に動かない存在にならないと国家の存立すら困難になることは火を見るより明らかであります。誠に、今後の教育は、是迄の軍備に代る国家の重要事なのであります。」

国家存立のための教育という強い信念が佐藤仙一郎にあったのである。国家存亡についての当時の危機意識がひしひしと伝わってくる。

佐藤の式辞は、ついで、「関谷学園」が民主主義国家の建設のための教育の日本初のモデルスクールとなることを説明している。「民主主義の本質上、国家の文教当局が今迄のやうに、凡てを決定し全国に指示するといふやうなもの」でないので、「自然の結果として、モデルスクールといふものが」考へられたと述べ、「研究指定学校」であり、「教員再教育の場」でもあり、農村部のモデル学校である「関谷学園」は「農山村文化興隆」の拠点としての使命も持っていると説明している。

式辞は、それに続けて、教育研修所のモデルスクールとして学園が構想された経緯とその計画、さらに学園の内容におよんでいる。内容は「現行法規との関係、教科目・教授法、経営のすがた、職員、男女共学」

のそれぞれの面から論じている。「現行法規との関係」では、国民学校の部分についてはだいたい現行法規通りとし、青年学校の部分については「大改変を加え」、「前期の三年は普通教育を施し、現在の中等学校の四年程度までの教育」をし、「後期の三年は二面を有たせ」、「一面は現在の専門学校に近い程度の公民教育を施し、他の一面は現在の中等農学校程度の教育を施す」と述べている。

「教科目・教授法」では「農村工学」や「衛生」など「実学を尚ぶ」こととし、「従来になかった教授法を多量採用する」こととしている。経営面では、国民学校と青年学校が一体となって、「関谷村を文化郷土にする」ため、ひとつの「関谷学園」として学園経営することとしたと述べている。また、職員は多種多様な人を集めるよう配慮したこと、さらに男女共学とすることなどを説明している。そしてこうした内容が、当時注目されていた米国教育使節団報告書と一致することを付言している。

そして最後に「関谷学園の理想」を以下のように述べて終わっている。

「学園の教育は実質的には文化郷土の建設を目ざすものではありませんが、窮極の目的は、国家文教当局の御指導を受けて、祖国日本再建の原動力たるべき国民新教育の根底部面に対して指南車となることでもあります。志はあくまでも国家にあるのであります。而して私は、愛国の熱情を以って、救国の為にこの教育を実現したいのであります。私は人後に落ちない愛国者であります。然し、今後とるべき教育の行き方は、之迄の愛国的な行き方とは自ら異なるのでありまして、前述のやうに、日本の歴史に合致する民主主義的教育によって文化郷土を建設することというを以てその方法とするのであります。」

「最後に、関谷学園の直接の理想とするところは『日本第一村』であり、直接の目標とするところは『日本第一校』であります。この教育が順調に所期の如く進展いたしますならば、或年月の後には、日本教育史に一つのエポックを与へ、世界教育史の一ページを占めることにもなるであらうと思ふのであります。その年月は、先ず、三十年と見積つてをります。荒蕪を開墾して種を播くこと、これが私の仕事であります。私の仕事の終わる頃には、更に大なる夢を見る人士が出て、この仕事を発展させてくれます事を、開園の頭初に当って祈念してやまない次第であります。¹²⁾」

佐藤仙一郎の「関谷学園」にかける熱い思いが伝わってくる式辞である。原稿には「昭和21年7月1日夜11時稿了」と記されている。開園式前夜深更まで式辞を練っている佐藤の姿が目には浮かぶようである。

(2) 最初の授業——『デンマーク国の話』読み聞かせ

開園式は、午後教育研修所長・城戸幡太郎の講演が行われ閉会したが、その後、学園の児童・生徒全員を集めて、佐藤仙一郎が、内村鑑三の『デンマーク国の話 信仰と植樹とをもって国を救いし話』(1911年10月22日、東京柏木の今井館で行われた講演を、後に内村自身が文章化した作品。初出は、『聖書之研究』第136号、1911年。1913年聖書研究会から書籍として出版。1939年には、岩波書店編集・中等学校用教科書『国語』巻3に「興国の樅」と題して、戦後1947年には、文部省編集小学校用教科書『国語』第6年上に、「みどりの野」の題でそれぞれ収められた)の読み聞かせを行っている。この読み聞かせは「関谷学園」最初の授業(授業はじめ)として取り扱われた。

授業の題は、中等学校用教科書『国語』巻3と同じ「興国の樅」であった。その物語は、1864年にドイツ、オーストリアの強国によって戦争に追い込まれ、その結果、敗戦となり国土の最良の部分を持って小国となってしまったデンマークが、乳製品の生産によって、世界で最も豊かな国の一つとなった話であった。内村鑑三は、敗戦から立ち上がったデンマークを例にとりあげ、「難しいのは、敗戦国の戦後の経営である」、「戦いに敗れて、精神に敗れない民が、真に偉大な民である」、「国が暗き時に臨みしとき、精神の光が必要になる」と説いている。その言葉はそのまま、佐藤仙一郎の願いであった。「関谷学園」が敗戦後の「精神の光」となることが佐藤仙一郎の学園創設の目的であったのである¹³⁾。

Ⅱ. 「関谷学園」の実態

1. 課程と生徒数

発足時の課程編成および生徒数についてみてみよう。『関谷学園関係資料』中の「関谷学園開園当時の概覧」（以下「概覧」）によると、国民学校にあたる部分を学園の「初等科」、青年学校の前期3年にあたる部分を学園の「本科」（のち開校後「中等科」と改称）、後期3年を学園の「高等科」とし、最上級学年1か年を「研究科」としている。いわば6・3・3・1という形で、当時の国民学校と青年学校の制度との整合性（国民学校初等科から青年学校本科修了までは通常男子は13年間の課程であった）を図っているのである。なお、本科と高等科においては、フルタイム（1週20時間）の「甲類」のほか、並行して、1週間に6時間出席するパートタイムの「乙類」を組織している点が特徴的である。

関谷学園の本科と高等科（青年学校の部分）の開園直前の生徒数（「概覧」には「予定」と付記されている）は以下のようにになっている。

	甲 類					乙 類					生徒合計
	学年	男	女	計	学級	学年	男	女	計	学級	
本 科	1	38	36	74	2	1	12	19	31	1	105
	2	18	25	43	1	2	19	35	54	1	97
	3	3	4	7	1	3	53	39	92	1	99
	計	59	65	124	4	計	84	93	177	4	301
高 等 科	1	2	0	2		1	58	55	113	3	115
	2	2	2	4	1	2	25	28	53	1	57
	3	0	0	0	0	3	18	7	25	1	25
	計	4	2	6	1	計	101	90	191	5	197
研究科		1	4	5	1						5

本科ではパートタイムの乙類の生徒数が少なく、逆に高等科ではフルタイムの甲類の生徒数が少なくなっている。学年が進むにつれて働きながら学ぶパートタイムの生徒が多くなっているのである。フルタイムの高等科は、第1学年と第2学年が「生徒ノ実カヲ考慮シ本年度ハ合併シテ第一学年ノ授業を為ス」と付記している。複式学級となっているのである。また、乙類では本科第3学年を制度上は2学級編成としているが、「職員及設備ノ関係上本年度ハ合併授業」としている。甲類と乙類の生徒数は甲類計130人に対し乙類計368人である。

2. 教育課程と授業時数

次に「概覧」によって甲類と乙類のそれぞれの科目と毎週教授をみてみよう。毎週教授時数の総計は甲類が20時間、乙類が6時間となっており、甲類では「午後ハ討議・研究・作業・体育運動・実験実習・家政育児（女子）」にあて、授業は午前中のみとしている。科目は、甲類本科が「公民、国語、数学、科学、芸術、農業、外国語、衛生」からなり、高等科は「道義、哲学、国語、政治・経済・社会、科学、芸術、選択科目、衛生」から構成されており、政治経済社会や選択科目が重視されている。乙類の科目は、本科が公民、芸術、農業、外国語、衛生からなり、高等科は道義、政治経済社会、芸術、農業からなっている。

甲類本科	第1学年	第2学年	第3学年	甲類高等科	第1学年	第2学年	第3学年
公民	2	2	2	道義	2	2	0
国語	3	3	3	哲学	0	0	2
数学	3	3	3	国語	2	1	1
科学	3	3	3	政治経済社会	4	4	6
芸術	2	2	2	科学	3	3	0
農業	3	3	3	芸術	2	2	2
外国語	3	2	2	選択科目	6	7	8
衛生	1	2	2	衛生	1	1	1
合計時数	20	20	20	合計時数	20	20	20

乙類本科	第1学年	第2学年	第3学年	乙類高等科	第1学年	第2学年	第3学年
公民	1	1	1	道義	1	1	1
芸術	1	1	1	政治経済社会	2	2	2
農業	2	2	2	芸術	1	1	1
外国語	1	1	1	農業	2	2	2
衛生	1	1	1	合計時数	6	6	6
計時数	6	6	6				

3. 教員組織

(1) 教員確保

学園の初等科と、残置した国民学校高等科は旧来に準じて授業を行った。国民学校高等科は渡辺萬壽太郎邸で授業を行った。ところが青年学校段階の本科(3か年)と高等科(3か年)は、開園式後さらにひと月ほど授業の開始を遅らせた。その原因は教員不足であった。『関谷学園関係資料』中に「関谷学園職員一覧」と題する1946年7月2日現在の予定職員の一覧がある。青年学校30人、国民学校20人程度からなっているが、音楽、体育、家事、工学などを担当する青年学校部分の数名が未定となっている。

教員確保については、佐藤仙一郎『日誌』からかなり苦勞しているようすがうかがえる。それは何よりも有能な教師を集めたいと考えたからであった。佐藤は後に手記(「関谷学園の功績」)のなかで「学力の高い教師」を集めることに意を用いたこと、それは『関谷学園職員一覧表』を見てもらえば、一目瞭然¹⁴⁾であると述べている。広島文理科大学教育学科を卒業して栃木師範学校男子部教授・付属国民学校主事であった同僚の吉成三雄を教頭に招聘したのをはじめ、広島高等師範学校を卒業して海軍兵学校教官となり、敗戦後は新潟中学校教諭となっていた目黒治夫を科学担当の教員に迎えている。また、新潟青年師範学校助教授であった松田時次を、畜産、農産加工の教員として招いている。青年学校関係教員は、学歴でみると師範学校卒業者より大学や専門学校、高等師範学校の卒業者が多くなっている。

さらに、美術は、安井曾太郎門下の画家で関谷村に疎開していた小野末吉に依頼し、米沢工業専門学校卒業の池田格郎を数学、早稲田大学文学部卒業の川崎輝男を国語、文理科大学で心理学を専攻した吉成を英語の、それぞれ担当とするなど、教員免許の所持にかかわらず高い専門性をもった教員を登用している。特に吉成は大学入学前に東北学院で英語を習い、英米の文化や慣習に明るかった。ミッションスクールでネイティブのアメリカ英語を習った吉成夫人も英語の授業に参加した¹⁵⁾。

(2) 高い同僚性

佐藤園長は、自ら優秀な教員を集め彼らに自由に意見をいわせて教育を創り上げていく方針であった。文部省の教育研修所からも「何も注文は出さないから、善いと思うことは、どんなことでよいから、自由にやってみてくれ¹⁶⁾」といわれていた。「関谷学園」の教員室はさながら大学の演習室であった。その当時の様子が以下の様に描写されている。

「教務室は、職員にとって自己研修の良い場所であった A 先生が B 先生に専門的な質問をすると、A 先生が丁寧に説明をされる、すると C 先生が関連質問を出される、今度は D 先生が答えると、段々話題が広がって全職員が皆熱心に他人の言に耳をかたむける、聞き上手であると同時に、話上手でもあった。¹⁷⁾」

当時若手の女教師であった石井中は、「忘れられないことの一つに、若い先生のなされた詩の教材の研究授業の研修会には大勢の先生が自分のお考えを述べられ、後日同じ詩について更に研究授業をされるなど、私には驚くばかりの密度の濃い討論が続けられました。会議も本当に時を忘れて熱心なものでした¹⁸⁾」と述懐している。

教師たちは、互いに支えあい、高めあう協働的な関係、いわば高い同僚性のもとで日常的に集団的な教育研究活動を進めたのであった。それは、自由に研究し、自由に授業を行い、自由に発言できる体制と雰囲気が保障されていたからであった。こうした教師集団の雰囲気は、生徒たちにとって良い環境を作り出した。この当時の生徒の一人は、「着物も履物もまちまち、食べ物も十分でなかった時代、それなのに何故か教室の中は明るく、楽しかった印象ばかりが強く残っている。新しく開校された学園で先生や生徒の張り切った雰囲気が充満していたからではなかっただろうか¹⁹⁾」と回想している。むしろきちんと整備されていなかったからこそ、また教師と生徒の創造と工夫が求められたからこそ、自由な空気や楽しく明るい雰囲気が充満していたというべきであろうか。いずれにしろ、佐藤学園長や吉成三雄教頭の学校経営によって、こうした自由で活気あふれる学園生活が生み出されたのであった。

4. 授業内容

本科（中等科）と高等科の最も大きな課題は授業内容の確定であった。佐藤学園長を中心にして授業内容の骨子を定めたが、教科書はなく、自ら「教科書を作るつもりでやる²⁰⁾」という意気込みで臨んだといわれている。『関谷学園関係資料』のなかに佐藤仙一郎自筆の「本科・高等科の授業内容」と題した各科目内容を個条書きしたメモが残されている。それを見ると芸術で民芸を扱い、工学で農村工学を対象とするなど、全体的に農村生活に即した内容にする工夫が見られる。本科の公民科では、「旧日本ノ本質ト対シテ新日本ノ本体ヲ明ラカニスルコト。新憲法の基本精神」とあり、高等科の道義科では「終戦の詔勅」「ポツダム宣言と日本新生の道」「報本反始の道徳と 12 月 15 日の指令」「1 月 1 日の詔書」「封建制改新の実相」「国民新道徳」「世界平和への貢献」などとその内容が列挙されている²¹⁾。佐藤仙一郎は、敗戦後の新しい国家の在り方を見据えながら授業内容づくりを模索していたのである。

授業内容は暗中模索であったが学園は活気に充ちていた。当時の教員は、「新任先生が次々と四名着任されるに従って、音楽、理科、数学、英語などの教科が充実していった。教科書などはまだ無かった。それで先生方はみな、何をどのように教えるか、夫々工夫して、手造りの教材を作られていた。生徒側から見れば、先生毎にちがった、ユニークでバラエティーに富んだ授業だった²²⁾」と回想している。

また別の教師は、「午前中に教授を主とした教科目を集中し、午後にクラブ形式で生徒に自由な学習参加の機会を与え、討議・グループ作業・研究調査・体育運動・実験実習を主とした学習、女子には家政・育児などの時間にあてた。(中略) 英語クラブは最もすぐれ、日本語を一切使用しない学習であり、電気クラブ

は自主学習のほか、担当教師の指導で、家庭電気の実際の相談をうけ、訪問して修理し喜ばれた。²³⁾」と回想している。自由な雰囲気の中かで教師それぞれの持ち味を生かした教育が展開されたのであった。

Ⅲ. 「関谷学園」の終焉

1. 新制中学校の発足

村人の期待を担って開校した関谷学園であったが、1947（昭和22）年4月、新学制の発足とともに、青年学校は廃止され「関谷学園」は関谷村立関小学校と同関谷中学校となった。わずか9か月で関谷学園は空中分解してしまったのである。それには「関谷学園」中等科（本科）・高等科の法的基礎であった青年学校が廃止されたことが大きく影響していた。当時、1947年度中は存置された青年学校もあったが関谷村の場合は廃止されたのであった。これにより、「関谷学園」の生徒は行き場を失う者も出た。また、「関谷学園」の修了では新制中学校卒業と同等の資格が得られなかった。そこで希望者は新制中学校の第3学年に編入させ、新制中学校卒業資格を付与することになった。

発足時の関谷中学校の第3学年はまだ義務教育ではなかったが、学園の中等科（本科）の2・3年生、高等科、国民学校高等科2年生のそれぞれから希望者を集め、さまざまな年齢の生徒からなる混交クラスが構成されたのであった。中学校3年生は卒業時38人であったが、そこには「関谷学園」の高等科からの生徒と中等科3年からの生徒がそれぞれ8人（計16人）ずつ含まれていた²⁴⁾。

2. 高等学校定時制分校の設置

1948年度からの新制高等学校発足準備が進むと、定時制課程を関谷村に設置することが模索された。当初は入学者が少ないことが見込まれ設置が困難とされたが、県当局との折衝を重ねた結果、県立村上高等学校の定時制関谷分校の設置が実現することとなった。佐藤仙一郎は後に、「戦後、定時制高等学校制が出来、始め県の当局がその配置を定めた時には、関谷に設置する意は無かったのですが、文部省教育研修所の実験校として、同じ性格のものが既に存在したので、無視することが出来なくて、県の計画の中に取り込んだものでありました²⁵⁾」と述べている。「関谷学園」はなくなったが、高等科と研究科の遺産は村上高等学校関谷分校に引き継がれたのであった。

関谷分校は1948年6月に認可され、7月に入学試験を実施し、8月に開校した。当初の入学者は50人ほどで、関小学校の礼法室を教室として出発した²⁶⁾。関小学校には関谷中学校も同居しており小・中・高の一貫教育の形が再現されることとなった。多くの教師は「関谷学園」から関小学校や関谷中学校で引き続き勤務しており、「関谷学園」の自由闊達な雰囲気は依然存続していたといわれている。

3. 「関谷学園」の最期

ところが「関谷学園」は四面楚歌の状況にあった。まず、学園の「屋台骨」ともいえる渡邊萬壽太郎の村長辞任であった。1946（昭和21）年11月、村長として戦時国策を進めたことを理由に公職追放となったのである。渡邊は経済的援助者というにとどまらず、学園を構想した一人であった。教員や生徒と村の未来を熱く語っていたといわれている。村長もまた関谷学園の有力教師の一人といってよかった。その後、渡邊は農地改革で経済的な力も失うこととなった。190町歩（戦前所有した400町歩の田畑は1944年に国策にしたがって自ら解放した）の田畑の99%を失ってしまった。渡邊家はなお、広大な山林を所有してはいた

が、小作収入を絶たれ、村を経済的に支えることはできなかった²⁷⁾。

ついで校長の交代があった。1947年3月31日、新学制発足を前に、佐藤仙一郎に関小学校と同関谷中学校の校長の辞令が出されたが、佐藤は前年秋から自宅静養しており、結局、1947年10月、新潟県柏崎市の国立療養所に入院し、11月末に病氣休職となった。あとは教頭の吉成三雄が校長に就任し「関谷学園」の理念と実践を引き継ぐことになった。ところが、1949(昭和24)年1月31日付で、新潟県から、吉成校長に「休養を命ずる」辞令が出された。校長を辞めさせられたのであった²⁸⁾。

その背景には何があったのであろうか。当時の教員の回想によると、1949年1月25日に、村上・岩船地方事務所和学校教育課長が関小学校を直接訪れ、吉成校長が病弱なこと、小学校でクリスマス行事をしたことが宗教的中立性に違反したこととあわせて「新制度による小・中学校が発足したのに、未だ関谷学園の看板を掲げて、地方事務所や県教委の方針・運営に従わない²⁹⁾」ことを理由に、校長更迭を迫ったとされる。

この直後、県から吉成校長に休養命令が出されたのであった。吉成三雄は、佐藤が病氣療養して後の学園経営の中心的な教員であった。持ち前の心理学の知見を活用した斬新な英語教育は、生徒の興味・関心を引き、学力を高めることにもなっていた。

当時の職員の一人は、その吉成三雄の辞任はまさに「関谷学園の最後通告³⁰⁾」であったと述懐している。吉成三雄は、2か月後の3月31日には、新潟県で設置が進められていた教育研究所長に転出させられたが、教職員や生徒、村民との送別会はもたれなかった。ひっそりとした単身赴任であったといわれている³¹⁾。県の教育研究所は、1950(昭和25)年4月1日まで設立が延期され、所長は結局、教育次長の兼任となり、吉成は所長にはなれなかった。しかし、吉成は所員として、専攻した心理学の学識を生かし知能・性格検査の開発に従事し、児童相談にも携わり、多くの業績を上げたといわれている。ところが、持病の結核が悪化し、1年余りで退職し、郷里の仙台市に戻った³²⁾。

1949年3月には、関谷中学校では、校長職務代行となっていた目黒治夫教頭をはじめ有力教員5人が村外の学校へ転任させられた。こうして「関谷学園」の残光もついに消え去ることとなった。6・3・3制実験学校は、皮肉なことに6・3・3制実施によって権力的につぶされてしまったのであった。

まとめ－「関谷学園」の歴史的意義

1. 一貫した青年期教育

「6・3・3制発祥の地」の碑を建設する際に、関小学校は、6・3・3制か6・3制かどちらにすべきかを文部省に問い合わせ、その結果、文部省の回答に基づいて6・3・3制にしたといわれている。本稿で考察したように、「関谷学園」の真髄は青年学校の部分、すなわち中等科と高等科の課程にあった。村の産業と結びついた6年間(青年学校研究科の部分まで入れると7年間)を通して、村の後継者を育てるというのが、関谷学園の重要な目的であった。したがって、「関谷学園」の教育は小・中学校の9年間で完結するというものではなく、後の高等学校段階の高等科こそが、村の産業と関係して重要となるはずであった。

新学制発足直後の文部省の見解も、たとえば『新制中学校 新制高等学校望ましい運営の指針』(1949年)を見ると、中学校と高等学校を一連・一体のものともみなす方向性をもっている。この点、関谷学園の在り方と軌を一にしていた。関谷学園は、幼稚園から高等学校までの教育機関であることを標榜していたが、それは地域の子ども・青年は地域が育てるという、教育の地域自治の理念に依拠していたからである。そうであるならば、最も重要な後継者育成の最終段階を地域から切り取ることは教育自治にとって致命的であった。

2. 「全村教育」の中心としての学校

関谷学園のもうひとつの特徴は全村教育であるという点である。全村教育とは、学校を村全体の教育、すなわち広い意味で社会教化の中心として位置づけ、産業振興や福祉の基礎として、村落共同体の自治的な営為によって独自の教育を創造していこうとするものである。村落共同体の自治的結合が強い地域では、こうした全村教育が見られ、戦前昭和期には農業恐慌による農村の衰退という状況のなかで、農村の振興のために意識的に推進されたところも多かった。城戸幡太郎は教育研修所の研究指定学校の目的について、以下のように述べている。

「新教育を施す模範学校すなわちデモンストレーション・スクールを作り校長が教員の再教育をなし、学校を民主化すると同時に生徒を通じて両親の再教育、ひいては学校が中心となり社会生活を民主化する教育運動を展開せしめる。学校は社会生活の文化的中心とならねばならぬということが模範学校設置の趣旨である³³⁾」

全村教育の中心としての役割を学校に期待しているのである。関谷学園はこうした意味で全村教育という性格を持った実験学校ということができる。

3. 地域産業と結びついた「生産学校」

次に、関谷学園は本稿の前編で指摘したように生産学校としての特徴を持っていた。これが三つ目の関谷学園の特徴である。しかもそれらを、地域自治によって実現させようとしたところに大きな意義があった。ところで、こうした教育は当時の地域社会の要求にそったもので、決して特別なものではなかった。戦前から戦後にかけて、さまざまな地域でこうした特質をもった教育が追求されている。その総合的な実証的研究はなお今後の課題である。

注

- 1) 佐藤仙一郎『日誌』(関谷学園企画の頃)。佐藤仙一郎氏旧蔵・関川村歴史資料館蔵『関谷学園関係資料』所収。この『日誌』の一部は、大滝友和『関谷学園資料編—日本六三三制実験学校』(1999年、私家版)および石井中『関谷学園を偲ぶ—関谷学園資料編に続く』(2001年、私家版)に収録されている。
- 2) 前掲『関谷学園を偲ぶ』p.21。
- 3) 佐藤仙一郎『日誌』4月6日。
- 4) 前掲『関谷学園を偲ぶ』p.p.41-42。
- 5) 同上書p.17。
- 6) 佐藤仙一郎『日誌』5月31日。
- 7) 石井中「関谷学園に思う」『関谷中学校三十周年記念誌』(記念誌作成委員会、1977年、)所収。前掲『関谷学園資料編』p.118に収載。
- 8) 「当時の職員会議から園長に提出した意見書」『関谷学園関係資料』所収。
- 9) 国立教育研究所編『国立教育研究所十年の歩み』国立教育研究所発行、1961年、p.p.9-3。
- 10) 佐藤仙一郎『日誌』6月8日。
- 11) 佐藤仙一郎「雪国農村文化研究所の構想」『関谷学園関係資料』所収。
- 12) 佐藤仙一郎「関谷学園開園式式辞」『関谷学園関係資料』所収。
- 13) 佐藤仙一郎「興国の縦」『関谷学園関係資料』所収。
- 14) 佐藤仙一郎「関谷学園の功績」『関谷学園関係資料』所収。
- 15) 三城秋子(旧姓吉成)「関小・関中の思い出」前掲『関谷学園を偲ぶ』p.122。
- 16) 前掲「関谷学園の功績」『関谷学園関係資料』所収。
- 17) 吉成正「六・三・3の発祥とその後のドキュメント」1998年、前掲『関谷学園を偲ぶ』p.60。

- 18) 前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.48。
- 19) 卒業生・佐藤寿の回想、前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.44。
- 20) 前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.40。
- 21) 佐藤仙一郎「本科・高等科の授業内容」『関谷学園関係資料』所収。
- 22) 前掲「六・三・制の発祥とその後のドキュメント」前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.60。
- 23) 新潟県教育百年史編纂委員会編『新潟県教育百年史 昭和後期編』新潟県教育委員会、1976年、p.61。
- 24) 前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.75。
- 25) 1972年4月18日付の佐藤仙一郎から関川村助役に宛てた書簡。前掲『関谷学園資料編』 p.133、収載。
- 26) 前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.80。
- 27) 小村弐『北越の豪農 渡邊家の歴史』関川村、1992年、による。
- 28) 29) 30) 前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.83。
- 31) 当時「関谷学園」の女性教員であった石井中（旧姓渡邊）は、吉成三雄を偲んで次のように述べている。「先生と生徒との別れも、村人との別れの話も聞こえては来ない。佐藤園長に懇望されて地位も名誉も捨てて来村された先生。戦後の教育界の大変貌のうねりの中でも、常に微笑み、生徒・子どもたちに最善をつくされ、教師を励まし続けられた先生のお顔が今さらに懐かしく、心痛む思いで偲ばれるのである。」（前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.84）また、佐藤仙一郎は『関谷中学校三十周年記念誌』（記念誌作成委員会、1977年）に「興国のための実験学校関谷学園」と題する回想録を寄稿しているが、それには佐藤と吉成三雄と関係が以下のように記されている。「その後、城戸氏の公方面での働きによってわたしは、栃木師範教授をやめることになったが、出身が師範系統のために語学の力が不足である。被占領時であったので、特にその必要があるものと考えて、当時男子部の教授で附属小学校主事であった吉成三雄君にこの話をしたのであった。吉成君も生一本の学人、この仕事の意義の深さを感じて、その仕事に加わる気を起こしてくれた。この人は、英語に堪能な上に、教育方面の研究が深かった。わたしは、同君の義心を感じかつ喜んで、両家族が揃って来村したのであった。その後わたしは、結核で数年間を柏崎の国立療養所で過ごしたので、後は同君がやってくれたのであった。そして、この後、新潟県で作った教育研究所に長として転じたが、今は亡き人だとさく。」
- 32) 前掲「関小・関中の思い出」前掲『関谷学園を偲ぶ』 p.122。
- 33) 城戸幡太郎『民主教育のありかた』社会社、1947年6月、p.p.80-81。この本は、1946年頃の城戸の講演などをまとめた書物である。関谷村での講演などはこの本と同旨と思われる。